

痴呆性高齢者の生活行動に関する研究

—Kグループホームにおける時系列的な調査を通して—

石井研究室 大島 美鈴

1. 研究の背景と目的

高齢化率は17.9% (H13.8.1) に達し、ますます高齢化が進む中、痴呆性高齢者も150万人を超える状況となっている。従来の大規模な施設に対して痴呆性高齢者の生活・ケアの場の切り札として注目を浴び登場したのが「グループホーム」(以下、GH)である。GHは高齢者が地域において生活することが可能なように、空間的にも人数的にも小規模な形態であり、そこでは入居者一人ひとりに対する個別的なケアが求められている。

本研究では豊かな空間構成をもつGHを事例にとり、痴呆性高齢者一人ひとりが、どのような生活行動を展開しているのかを個別的かつ時系列的な行動観察調査をもとに把握し、GHにおける生活の形を明らかにし、そこに関わる様々な要因を明らかにすることを目的としている。また、新たに入居した入居者が、3ヶ月間の時系列の中で、どのように生活になじんでいくのか、空間利用の変化、ケアの関わり方などの変化をとらえる中で把握し、環境移行の一事例を検討することにより生活の場としてのGHのあり方を探るための基礎的な知見を得ることもあわせて行う。

2. 調査の方法

調査は入居者・スタッフの行動観察調査(7:30～19:00までの11時間半)により、10分毎に調査対象者の滞在场所、行動、周囲の状況などを詳しく観察・記録した。特に新入居者のBさんに関しては、生活行動の経時的変化を中心に観察した。調査は、9月から約3ヶ月間に渡り、約2週間に一度・計5回(5日間)行った。また、入居者の属性やケアに関するスタッフへのヒアリング調査も合わせて行った。

3. 調査対象施設と対象入居者の概要

調査は痴呆性高齢者GH[Kホーム]で行った。同施設は、1995年に宮城県名取市に開設されたホームで、多様な共用空間と個室の居室によって構成されている(図1)。中央に中庭を配し、その周辺に廊下を介して居室を並べたロの字型の平面構成で、居室はすべて手洗い付きの個室となっている。共用空間として主なもの

のは、囲炉裏のある居間、食堂、キッチン、畳があり、庭、中庭も重要な共用空間の一つとなっている。

定員9名の同施設では、調査時点で痴呆の程度が軽度の入居者が6名、中度が1名、重度が2名となっており、全員が女性である。痴呆が重度の2人の入居者は、自立度も低く移動を含めて介助を要する。この2名を含み開設当時から入居しているのは3名である。入居者の属性は表1に示す。

4. 入居者の生活行動

4-1. 行為から見た生活行動

G・Fさんは痴呆が重度で自立度も低いためすべての行為に介助を必要とする。そのため食事の時間も長く、日中特に何もしないで滞在している時間が長い。

一方自立度の高いH・Iさんは、自主的に食事作り等家事に関わる割合が高く1日のほぼ半分を家事にあてている。Dさんは一人で散歩に出かける事があり外出の割合が高くなっている(図2)。

4-2. 空間利用から見た生活行動

B・Hさんは、居室に長く滞在している様態が見て

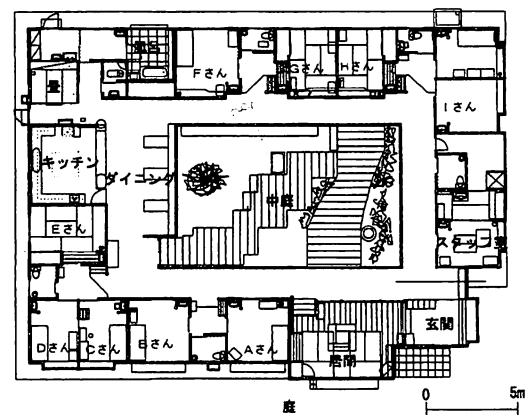


図1 Kホーム平面図

表1 調査対象の入居者

	年齢	入居時期	入居前	痴呆以前の職業	痴呆の種類	痴呆程度	日常生活自立度
Aさん	80歳	00'6月	自宅	-	アルツハイマー型(AL)	中度	一部要介助
Bさん	90歳	01'9月	老健	自営業 菓子屋	脳血管性(CV)	軽度	一部要介助
Cさん	88歳	97'4月	自宅	-	アルツハイマー型	軽度	一部要介助
Dさん	77歳	00'2月	老健	看護婦	AL+CV	軽度	自立
Eさん	90歳	98'1月	老健	行商	AL+CV	軽度	一部要介助
Fさん	94歳	97'4月	自宅	-	脳血管性	重度	ほぼ要介助
Gさん	80歳	97'4月	自宅	-	脳血管性	重度	ほぼ要介助
Hさん	77歳	00'4月	病院	-	アルツハイマー型	軽度	自立
Iさん	69歳	00'5月	病院・老健	農家	脳血管性	軽度	自立

て取れる(図3)。G・Fさんは日中の多くの時間をダイニングで過ごす。スタッフの目の届く位置に座らせ、スタッフによる誘導がない限りその場で滞在している。E・Iさんはキッチンでの作業が多いためそこでの割合が高い。A・Dさんは作業やテレビを見るために、居間での割合が高い。

4-3. 生活展開から見た生活行動

入居者別に5回の調査での生活行動を重ね合わせたものが図4である(E・Fさんの事例)。入居者それぞれが比較的独自の安定した生活パターンを形成している事がわかる。

4-4. 他者との関わりから見た生活行動

居室で一人で過ごす事が多いB・Hさん、居室以外の共用空間で一人で過ごすことが多いG・Fさん、その他空間を共有しながら間接的な関わり合いを持てての行動が多いA・D・Iさんなど、他者との関わり合いも個々で異なる。

5. Bさんの環境移行に伴う生活行動の変化

入居当初は居室にこもりがちで、食事等必要なときを除いては共用空間での滞在が少なかったが、3ヶ月を経過し徐々に自主的に共用空間に出てくるようになった。他者との積極的な関わりは見られないものの、自ら下膳などをするようになった(図5)。

6. まとめ

本研究を通して、入居者の生活行動を把握することで、GHという形態の中で、その生活は必ずしも「グループ」によって展開されていくものではなく、入居者の状態、個性などによる個別的な生活構成と、その相互の関係の上に成り立っているものであるということが明らかになった。

またBさんの事例は、まだ十分にホームでの生活に

なじんでいるとはいいがたいが、徐々にではあるが、間接的に他の入居者の影響を受けての生活行動もみられるようになってきていることを示しており、グループでの生活と個人の生活の関わり合いが、そこからは見てとれる。

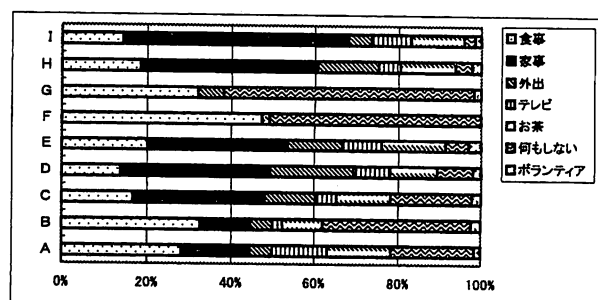


図2 各入居者の行為別にみた構成割合

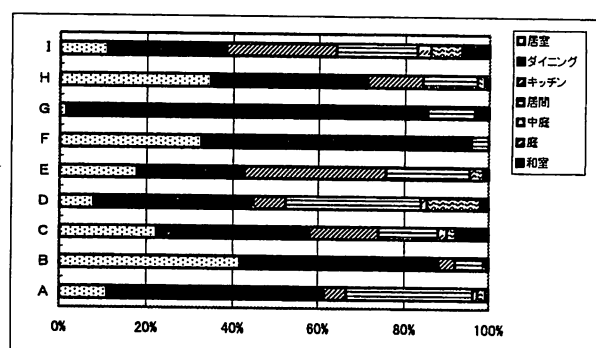


図3 各入居者の空間別にみた滞在割合

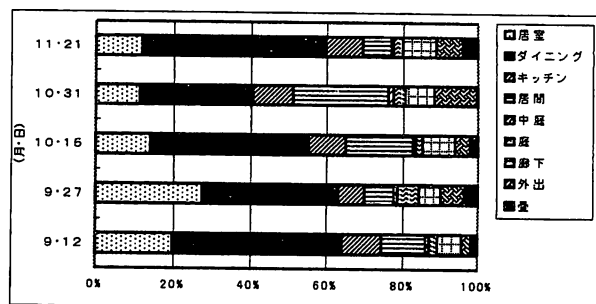


図5 Bさんの滞在場所の移り変わり

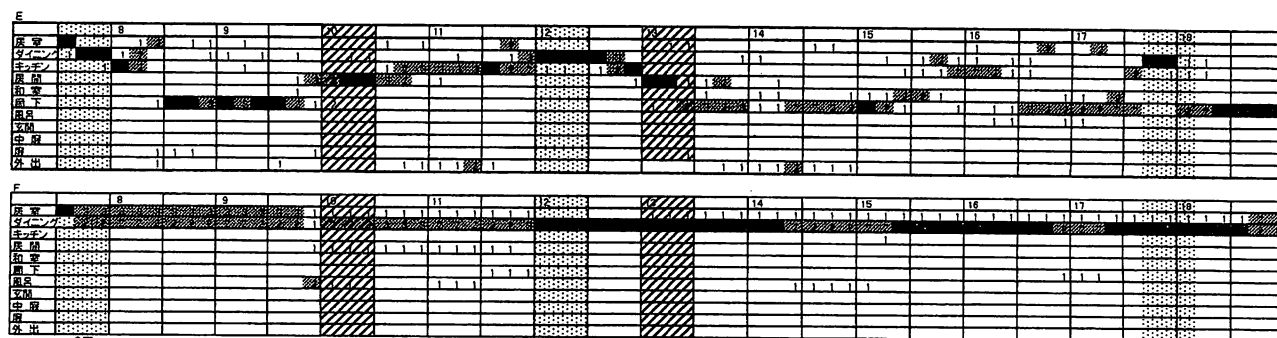


図4 入居者の生活パターン(上:Eさん、下:Fさん)

*数字は量りの頻度を示し、網の色が濃いところほど量りの度数が高いことを示す。